
魔法少女リリカルなのは ~ Walkureasegment ~

明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Walkure segment

【Nコード】

N0137X

【作者名】

明日香

【あらすじ】

とある傭兵は戦車の砲撃をくらい死んでしまった
だが彼がむかついたのは地獄でもなく天国でもないその世界は白の世
界そしてそこには土下座している少女
そしてその出会いから始まる新たなストーリー

注意 誤字脱字が多いですがどうかご容赦ください

プロローグ1（前書き）

どうも明日香です

実は書いていきずくと文字数オーバーしたので分けてました。

プロローグ1

俺は傭兵だ・・・

金さえ貰えばなんだってやるプロだ。

俺の家系は代々傭兵の家系で俺は13の頃から戦場を転々としていた。オヤジは俺が17の頃に敵の流れ弾で死んだしおふくろは子供の頃に死んでる。

そして俺も・・・先ほど敵の戦車の砲撃をくらい即死した。

ああなるほど人は死んだら自分の体を上から眺めるのか・・・

いま俺は元自分の体の上をさまよってる。

さて・・・いつ頃死神様のお迎えがくるのかな・・・などと考えていると俺の魂？が光だした。

そして・・・気がついたら俺は別のところにいる

「ここは？」

そこは先ほどの戦場ではなく見渡す限りの白、白にうめつくされた世界だった。

そしてそこには・・・

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい
いゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい」

1人の少女が土下座をしていた。

「ええつときみはなにs「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい
ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい
ゴメンなさい」……」

ああ……駄目だこの子……

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい
いゴメンなさいゴメンなさい」

しゃーないな……

「ん」

「あつー」

俺は少女の頭を一回デコピンをかます

「あつ……痛いです……」

少女は涙目でこっちをにらんでくる

「ええつとお嬢ちゃんここがどこかわかる？」

と俺は優しく声をかける

「はい！ここは白の世界で神様見習いの練習場です」

・・・ああこの子頭に変な電波を受信したのかな？

「あつゝノエルは変な子じゃないです！れっきとした神様です！・・・見習いだけど・・・」

どうやらこの子はノエルと言っらしい・・・しかし人の思考を読むとは・・・恐ろしい

「じゃあノエルちゃんはなんで誤ってたのかな？」

「それはですね・・・それは・・・それは・・・」

なんだ？俺の顔を見つめて・・・あれ？なんか目がうるうるしてきたような？

「ひいひいー！ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい」

また土下座して謝ってきた。

「ちよつとノエルちゃんおちて」ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい」・・・てい！

続きます

プロローグ1（後書き）

続きます

プロローグ2（前書き）

続きです

プロローグ2

再びデコピン涙目でおでこを押さえるノエル

「とにかく落ちてくれないかな俺はなんで俺がここにいるのか教えて欲しいだけだから」

「怒りませんか？」

「うんだから説明してくれないかな？」

「わかりました・・・」

こうしてノエルの説明がはじまった

数分後

「・・・とゆうことです」

とノエルの説明が終わった

「つまり俺が死んだのはノエルのミスで本当は俺は90まで生きる予定だったと・・・そうゆうこと？」

と俺はノエルの説明を簡単にまとめた。

「本当に申し訳ありませんでした！」

ノエルはまた土下座してくる

「いや別にいいけどね・・・で俺はこのあとどうなるの？」

ノエルは頭を上げて何か資料を見ている

「ええつと次は・・・別の世界に転生できるみたいですよ」

ああなるほどよくあるパターンだな・・・

「でどこの世界に行けるの？」

「ええつと・・・後でくじ引きで決めるみたいですよ」

ええーまじっすかなんか死亡フラグだらけなところはいやだな

「あ！でも何かの能力は2つだけ付けられるみたいですよ」

へへそいつはお得だな

「ああでもチート能力は無理ですから」

そいつは残念だ

「ええつと他にはありませんか？」

とノエルが聞いてくる　なぜか目がうるうるしてる

「あ、あもうないよ」

そう答えるとノエルはホッとたようだ

そして・・・

「それじゃここから一枚紙を引いてください」

とノエルは？ボックスをわたしてくる

いったいどこからだしたんだ？

「わかった」

俺は？ボックスに手を突っ込み適当に一枚の紙をてにとった

「ええつとなになに・・・魔法少女リリカルなのは・・・ってあれか！」

たしか俺の数少ない友達がよく言ってたな・・・

「ええつとそれじゃつぎは能力です何にしますか？」

俺は適当に考えてみた・・・ああそうだあれにしよう

「まず一つ確認前世の記憶は引き継がれるよね」

ノエルは資料を確認して・・・

「はい引き継がれますよ」

「じゃあ一つめだけど・・・魔力だけ？あれをかなりのレベルまで上げて欲しい」

「わかりました次はなににします?」

「たしかデバイスだっけ?あれを作る技術と知識が欲しい」

「わかりました」

「あ両方ともチートギリギリでよろしく」

「了解です。では行きますか?」

「ああ頼む」

「では行ってらっしゃい」

こうして俺の第二の人生がはじまった

プロローグ2（後書き）

明日香「どうも明日香ですよ」

？「おい」

明日香「なんですか名無しさん？」

？「てめーさ文字数確認したか？」

明日香「しませんでした」

？「次からちゃんとしろよ」

明日香「でもあと何話かはこの状態が続くよ」

？「まじかよ・・・」

明日香「まじだよ」

？「ちなみに次はい つうpするんだ？」

明日香「このあとすぐー！」

？「なにー！」

明日香「てなわけで連続投稿です」

転生そして始まり・・・(前書き)

連続投稿です

転生そして始まり・・・

さて・・・ここはどこだ・・・どうやら俺はまだ赤ちゃんらしい

「ほらみてアキラさんこの子が私達の子よ」

うむ・・・どうやら今俺は母親に抱かれているらしいそして今の声の主はどうやら母らしい

「そうだな」

今の声が父らしい

ちなみにらしいとゆつのはまだよく目が見えないからである

「この子の名前はどっしまじょう」

名前か・・・できたらかつこいいのがいいな・・・

「そうだな・・・マリアなんてどいだろう」

ん？マリアだと！まるで女の子の名前じゃないか父よ

「マリアちゃんか・・・いい名前じゃなね」

ちよつまじかよ母よ俺は男なのにそんなかわいい名前って・・・

「マリアちゃんそれが貴女の名前よ」

まさか・・・

「マリアちゃん私達の娘・・・」

性別が変わってる！

3年後・・・

どうも俺あらため私はマリア・テルミドールです

まあ最初は戸惑いましたがこの体にもなれました。

ちなみに父はアキラ・テルミドール 母はミーナ・テルミドールです。

そしてこの世界は第37管理世界ミリアーテスとゆう世界です

文化は地球の19世紀末のヨーロッパみたいですが魔法文化はミッドなみとゆう世界です。

私は最近魔法を覚え初めたもちろん独学ですがさて・・・これからどうするか・・・

ミーナ視点

どうも〜ミーナ・テルミドールです

今日はマリアちゃんの成長日記を書きます〜

しかしうちのマリアちゃんはとてもすごいんですよ〜何がすごいって？

そりゃ可愛いし頭もいいしなによりとても可愛いじゃない

あと最近魔法を勉強してるみたいねやっぱりすごい可愛いらしいわ
)

2年後

マリア視点

どうもマリアです。

最近は魔法もかなりのレベルになりました。

最近はデバイスの作成にとりかかっています。

そつゆえば私にも友達ができました。

名前はリカ・マクスエル

去年に家の隣に引っ越してきました。

まあのほほんとした女の子です。

よく私と一緒に魔法を練習しています。

ちなみに私の魔力資質はどうやら氷属性だそうです

ミーナ視点

どうもマリアちゃんの母のミーナです

最近の悩みはマリアちゃんがママってよんでくれないことです

そうゆえばマリアちゃんにお友達ができました〜パチパチ〜

あの子あんまり人と関わろうとしないからリカちゃんが友達になっ
てくれてよかったわ〜

まあ男の子だったら抹殺したけどね

転生そして始まり・・・（後書き）

またまた続きます

ヴラドニシエペシユさん誤字の指摘感謝します

転生そして始まり・・・2(前書き)

また分けましたすみません

誤字を修正しました ヴラド＝ツェペシュさん指摘ありがとうございました

転生そして始まり・・・2

リカ視点

ど、どうも初めましてリカ・マクスエルです。

マリアちゃんの友達です

最近マリアちゃんに魔法を教えてもらってます

マリアちゃんは無表情で何を考えてるかわからないけど本当は優しい子なんだよ

皆が勘違いしてるだけなんですよ

さらに2年後・・・

マリア視点

戦争がおきた・・・ 敵は神聖帝国・・・私達の住むセリアルト王国とロストロギアのおつかいでもめていた国である

父も母も戦場に行った。 リカの両親も戦場に行ったらしい・・・

そして私の考えたデバイスは完成した。

まず一つ目がメシア

待機状態は腰につけるチェーンに宝石がついたストレンジデバイスだ

展開状態の形状はM93Rをベースにしている色は黒

性格などは設定されてないため無し

これには特殊なシステムを搭載していて魔力を込めた弾を使用し弾を放つ武器で魔力を使う拳銃である

放たれる弾は氷の魔力弾だけどこれはぶっちやけ質量兵器で管理局にばれたらアウトの代物だ

カートリッジシステムとは違い魔力を上げるのではなく魔力を撃つとゆうイメージである

マガジンに入る弾は30発ちなみに弾を一発作るのは結構大変だったりする

2つ目はシンクーとゆう名前で性能と形はメシアと同じのストレンジデバイスであるちなみにいろは白

3つ目はガーデン

待機状態はネックレスに宝石がついている

展開状態は2つあり モード1がナイフで モード2が刀である

特長は特にないがこのデバイスが魔法制御をおこなっているインテリジェントデバイスである

性別は女で性格は主思い

やっぱりこれも質量兵器みたいな物で管理局にばれたらアウトになる
とまあメシアは右側にシンクローは左側につけてガーデンは首に付けて
いる

3年後

戦況は帝国が少し有利であり王国は不利な状況が続いていた。

あるひ軍のお偉いさんが私のとこに来たさていつたいなにをしにき
たのやら・・・

転生そして始まり・・・2（後書き）

明日香「どうも皆さん明日香です」

マリア「おい」

明日香「どうしたのマリアちゃん」

マリア「なんで俺が女になってるの？」

明日香「おもしろいからだ！」

マリア「しんでろ！」

明日香「さてここでいかなりマリアちゃんのプロポーションを公開します」

マリア「ちょやめ！」

ピ！

マリン・テルミドール

年齢10歳 精神年齢33歳

身長130cm 体重39kg

スリーサイズ B マリン「やめろー！」

明日香「ここからがいいところだろ」

マリア「だまれロリコンが！」

明日香「はっはっは」

マリア「うぜー！」

明日香「さてつぎも連続投稿だ」

軍（前書き）

連続投稿

ごめんなさいまた分けます

軍

軍からきお偉方のサザerland中将とカーデアス大佐はりビングのソファアに座っている周りには護衛が数名・・・ちなみに私は反対側のソファアに座って紅茶をのんでいるちなみに角砂糖を4つ入れている

これを見た中将と大佐は少しひいていた。

この体になってから甘いもの好きになった・・・いや甘いもの無しでは生きてはいけなくなった・・・

私は紅茶をテーブルに戻して・・・

「で、ようけんは？」

ま、だいたい予想はつくけどな・・・

「キミは軍に入るきはないかね？」

と中将が口にする

やっぱりね・・・まあ予想どおりだな

「キミは魔力も魔法のレベル高いそれに頭もいいどうかね」

「ちなみに入隊後はきみの位は中尉になり小隊長になることになる」

と中将の言葉に大佐がつけくわえる

「はぁ・・・」

私としては実際どうでもいい・・・実際は軍のお飾り物だろう十歳の少女が王国のために戦う・・・うん実にいいシンボルだな・・・

「ちなみにキミの友達のリカ君も入隊してくれることになっているちなみに彼女は少尉だ」

なるほど・・・私をおとすためにリカからおとしたか・・・まあリカに戦場はきついだろう・・・しかたないな

「わかりました入隊させていただきます」

私の返事に中将と大佐は笑みをうかべた・・・

「ではこれが必要書類だ目をとうしておいてくれ」

大佐が封筒を渡してくる

「では私達は失礼する今後の中尉の活躍をきたいする」

と中将と大佐はお決まりのセリフを言って帰った。

さて・・・これからどうするか・・・

「まあとりあえずリカとお話するか・・・」

私はリカの家に向かった。

そのごりかの悲鳴がマクスエル家に響いた

軍（後書き）

続きます

誤字を修正しました ヴラド＝シエペシユさん指摘ありがとうございました

軍2（前書き）

連続投稿です

軍2

1週間後私は必要な手続きをすまして私が隊長をやる部隊の寄宿舍を訪れた。

ちなみに部隊名は第14遊撃小隊で配置は首都レベユと最前線の間第26防衛拠点でさうだ。

ちなみにさつきからリカは私の横でガクガクと震えている

「なにガタガタ震えているの」

「やっぱり緊張しちゃって・・・マリアちゃんは怖くないの?」

「別に怖くはないよ・・・あとここではマリア中尉だぞリカ少尉」

「うう・・・わかりましたマリアちゃ・・・マリア中尉」

リカが少ししよぼくれる

「まあ二人のときならマリアでもいいけど・・・」

と優しく言ってあげると

「うん!ありがとう マリアちゃん!」

ととてもいい笑顔で言ってくるリカ

はあ・・・私リカにはとことんあまいな・・・

「さていいじうか・・・」

私達は寄宿舍に入っていた

ジエイク視点

俺はジエイク元第3特務遊撃隊の元隊長のジエイク・アバロツクだ
歳は19だ

ちなみに第3特務遊撃隊は第14遊撃小隊に再編されしかも隊長は
10歳の少女補佐官も10歳の少女 はっかりいってお荷物だ ち
なみに俺は副隊長・・・

俺達第3特務遊撃隊はかなりの場数をこなした戦闘のプロだそれが
最前線から呼び出されたと思えば軍のプロパガンダの少女二人の子
守りだ。はっきり言ってあり得ない

そして今日はその隊長様の着任日だ

さあってどんなやつがくるのか楽しみだ・・・お・・・きたみたい
だな

俺が寄宿舍の玄関前で待っていると二人の少女が入ってきた。

片方の少女のはさつきからおろしているな階級は俺と一緒に少
尉だな・・・彼女は癒し形だな・・・精神的な意味でだが・・・

もう片方は・・・こっちの子も可愛いな・・・でも緊張はしてない
みたいだな・・・しかも感情のない目 全く10歳には見えない子
だったな 階級は・・・中尉か・・・じゃあこっちの子が新しい隊長

さんか・・・

「マリア・テルミドル中尉 本日ずけで第14遊撃小队 隊長として着任しました」

「リカ・マクスエル少尉です 本日ずけで第14遊撃小队の隊長補佐官として着任しました。」

と二人は敬礼をしてくる おれも敬礼をかえして・・・

「ジェイク・アバロック少尉です。ようこそ第14遊撃小队へ今日はお疲れでしょう今日は部屋でおやすみください 部屋までご案内いたします」

つづきます。

軍2（後書き）

ごめんなさいまだつづきます

軍3 (前書き)

あふれてしまいました

じゅんなんせい () m

軍3

「よろしくお願ひしますアバロック少尉」

「ふええやつと休めるよ〜」

とマクスエル少尉は気を抜いたらしくかなり楽になっている・・・

「こちらです中尉」

俺は二人を部屋まで案内する 部屋に着くまで特に会話もなかった

「こちらが中尉のお部屋です」

「ありがとうございます」

「マクスエル少尉はこちらです」

「ありがとうございます〜」

と俺は二人に部屋を教える

「では中尉自分はこちらで・・・明日に隊人への挨拶をかねて着任式を行いますので・・・では失礼します」

俺は二人と別れて明日のことを考えた

さて明日どいなることか・・・まあ何もないことを祈るか・・・まあ無理だろうな・・・

俺は明日のことを考えるのをやめて部屋に戻った。

マリア視点

さて・・・明日か・・・

私は今 明日の着任式について考えていた。

私のような少女が隊長なんて普通はありえないよな・・・すくなくとも前世の俺ならキレルな・・・

実際さっきの小尉もかなりきてたみたいだったからな・・・

私は色々考えたが結局いい方法が見つからなかった。

しゃあない・・・なんとかなるだろ・・・せめて戦闘があればな・・・
ふあゝ・・・寝るか

私は布団に入り意識を手放した

軍3（後書き）

明日香「明日香です今回はマリアちゃんは寝てしまったためマリアはお休みです」

明日香「てなわけですまず皆さんに一言」

明日香「文才がなくてすみませんでした」m（――）m

明日香「ほんとすみません次からはちゃんと収まるように書きます」

明日香「話は変わりました・・・」

明日香「カップリングをどうしようかな・・・」

明日香「私の中ではマリア×リカはやるつもりですが」

明日香「マリア×ジェイクもやってジェイクのロリコン伝説でもやるのかな・・・なんて思っていますw」

明日香「皆さんも意見がありましたら送ってください」

明日香「次回はやっと戦闘シーンです」

明日香「あまり期待しないでください」（T・T）

着任（前書き）

投稿

着任

さて・・・私は今第14遊撃小隊の寄宿舎の前で着任式をとりおこなっている

「では新隊長に着任の挨拶をしていただく」

ん？・・・私の出番か・・・

ちなみに司会 進行はアバロック少尉がやっている

私は隊人の前に立つ

「敬礼！」

と少尉の声で全員がいや・・・一人だけ敬礼してないやつがいた。

「ハボック貴様！なぜ敬礼しな「少尉 構わない」ですが・・・」

私は少尉を無視して話し始めた

「まず始めに一つ確認をしたい 私が隊長に不満があるものは手を上げよ べつに隠す必要はないぞ」

まず手を上げたのはさつき敬礼をしなかった男そして一人また一人と手を上げていき・・・

「はぁーけつきよく全員か・・・」

まあここまででは予想どおりさて・・・やるか

「では代表してお前なぜ不満か言ってみろ」

私はさつき敬礼しなかった男を指差した

「けっ・・・何が不満だつてそりや最前線からいきなり戻されて餓鬼二人の子守 そのうえその餓鬼が隊長だつて そりや不満ですよ 中尉どの！」

はぁ・・・仕方ないか・・・

「なら私の命令にはしたがえないやつは何人いる そいつらは手を上げる」

そう言うど何人かは手を下げたがいまだ1人 残っている

「お前たちのことはよくわかった」

私は最初に敬礼をしなかったやつのもとに向かつて歩く・・・

「アバロツク少尉 こいつ名前はなんだ あと階級は？」

私は最初に敬礼しなかったやつを指差しながら言った

「ハボツク・フラガンだ階級は軍曹であります」

「そうか・・・フラガン軍曹」

「なんだ餓鬼」

フラガン軍曹はいまだへらへらしてまともはこちらを見ない。

「私の部隊に命令に従わないやつはいらない・・・今すぐ死ぬ」

私はメシアを起動させフラガン軍曹に構えて・・・

バーン

私は撃った

フラガン軍曹はとっさに反応して弾を防ぐが防ぎがたが甘い とっさにシールドを展開したのはさすがだが即席のシールド魔力があまりこもってないのかすぐに壊れる

「くっ・・・デバィ「おそい！」なあ！」

私はメシアをフラガン軍曹のデコに押し付ける

ちなみに私とフラガン軍曹では体格が違いすぎるので私は少し浮いている感じになっている

「・・・おい中尉さんよ・・・着任早々仲間殺しかい？俺も態度が悪かった反省してるだから・・・」

「知らん・・・命令を無視するやつが1人でもいるなら部隊全員の生死にかかわる だからいまここで死ね」

着任（後書き）

連続投稿

着任2（前書き）

入力できる字数がなぜかすくないPSS3での投稿なので1ページが
かなり短いですがご容赦ください

ではどうぞ

着任2

私の指がメシアのトリガーを引こうとしたとき・・・

ウウ~~~~ウウ~~~~ウウ~~~~

基調のサイレンが鳴り響いた

「当基地から北に14kmの地点にあるハンソン村にて帝国軍を確認 出撃可能な部隊は管制塔に連絡を入れ出撃せよ！くりかえす
当基地から・・・」

ちよつどいいな・・・

私はメシアを待機状態に戻し管制塔に念話をつないだ

「(こちら第14遊撃小隊 隊長 マリア・テルミドル中尉 管制塔きこえるか)」

私はあえて念話を声をだして喋った

(ザッ・・・ザザザ・・・こちら管制塔 オペレーターの シーザ
ー・ミリエス伍長です 今日着任されたテルミドル中尉ですね)

「(そうだ 着任の挨拶もまだだか今から第14遊撃小隊は今から
ハンソン村に現れた帝国軍を全滅させるため出撃する 飛行許可な
らびに戦闘許可を確認してほしい)」

「~~~~な、なにー！」「~~~~」

と第14遊撃小隊の隊人は驚くがすべて無視する

(テルミドール中尉 飛行許可ならびに戦闘許可でました 第14遊撃小隊 の出撃許可でました ご武運を・・・)

「(了解 念話終了)」

私は管制塔との通信をきって第14遊撃小隊の隊人にむけていった
「聞いてのどつり我々第14遊撃小隊はハンソン村に出撃しそこに
駐留する帝国軍を全滅する」

じっさい私達 第14遊撃小隊は私とリカの着任式のためすでに武装しているすぐに出撃は可能だ

「ちょっと待ってください中尉それはいくら何でもむちゃです」

「アバロック少尉 お前は私の命令に従うのか従わないのかどつちだ」

「それは・・・」

「戦場では一人の命令違反が・・・部隊の全滅につながることもある」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

第14遊撃小隊の隊人全員が私の言葉を聞いている

「だから私は命令の聞けない仲間はいらない・・・」

「だがこれだけはわかってくれ私が隊長になった限りは誰も死なせないし死なせるつもりない」

「だけど・・・命令違反が部隊の全滅につながるなら私はその命令違反を殺す」

「もし私の命令に従ってくれるならついてきてほしいもし私の命令に従えないならこなくていい」

「先に行ってる・・・」

私はそう言い残し空に向かった

つづきます

着任2（後書き）

連続投稿終了です

マリア「お前はネタがつきないのか」

（ゲ ドウ）「問題ない」

マリア「！だれだ」

明日香「はっはっは変化の術」

マリア「・・・」

明日香「まあ実は言うところ1ページがみじかいからね・・・」

マリア「はぁ・・・」

明日香「ちなみ感想を募集しています 感想が私の力になる！」

明日香・マリア「よろしくね」

着任3(前書き)

深夜に投稿・・・

よろしくね〜

着任3

ジエイク視点

俺は・・・いや俺達は誰もなにも言えなかった。

「先に行ってる・・・」

と言い残し中尉は空に上がった

「まってよ〜マリアちゃん」

マクスウェル少尉はすぐに中尉を追って空に上がった

そして・・・

「はあーしゃあねな・・・行くか」

と次に空に上がるうとしたのはハボックだった

「お前・・・」

俺は驚きを隠せない少なくともハボックは絶対に行かないと思っていたからである

「確かに俺は餓鬼の子守なんてごめんだ・・・だけどよさっきの中尉 いや・・・隊長の言葉なら信じられる気がするからよ」

そう言ってハボックは空に上がっていった

確かに・・・さっきの隊長の言葉なら・・・

「だがこれだけはわかってくれ私が隊長になった限りは誰も死なせないし死なせるつもりない」

こんな甘い理想を言う中尉・・・いや隊長だからこそついていってみたい

俺は周りを見る・・・どうやらみんな俺と一緒にいたい・・・

「さあってみんな！いくぞ」

「」「応！」「」

こうして俺達は空に上がった

マリア視点

私はハンソン村にむかっていると・・・

「まっつてよーマリアちゃん」

こんな情けない声で私の名前を呼ぶのは一人しかいない

「リカ少尉　いまは作戦中だろ」

リカは私に追いついて笑いながら言った

「どんなときでもマリアちゃんはマリアちゃんだよ」

はぁ・・・まったく・・・

私はリカの頭を撫でてあげた

「~~~~~」

うん やっぱりリカ笑顔は癒されるな・・・

などと和んでいるともう一人が飛んできた

「よう隊長さんよ」

「フラガン軍曹？」

私は意外な人物の登場に驚いた

「ハボックでいいですね・・・あとさっきの態度は悪かった すまん」

「ああ・・・私も殺そうとして悪かった・・・そしてよろしくたのむぞハボック軍曹」

私とハボック軍曹は握手をしたそのとき・・・

「お・・・隊長！」

そこにはアバロック少尉とほかの今第14遊撃小隊のメンバー3名がきてくれた

「結局全員じゃねえか」

ハボック軍曹の一言で私意外の全員が笑いだした

何かあったのか？

そのご私達今第14遊撃小隊はハンソン村にむけて飛び立った

着任3（後書き）

その道中・・・

「さて一応全員いることだし人ずつ自己紹介していこうか・・・まずハボック」

とアバロック少尉の提案で自己紹介が始まった

「あいよ・・・俺はハボック・フラガン 歳は24 ハボックつてよんでくれ」

「次は俺だ！ リチャード・マデューカス伍長だ歳は22 リチャードつてよんでくれ」

「位置的に次は僕かな・・・エリー・モンドル中尉だ歳は20 エリーとよんでくれ」

「次は俺か・・・ホオボス・バルデス軍曹だ 歳は26 ホオボスとよんでくれ」

「で俺が・・・ジェイク・アバロック小尉です歳は19 ジェイクとよんでください」

「次は私かな？・・・リカ・マクスウェルです小尉です 10歳です リカつてよんでくださいね」

「マリア・テルミドール 中尉だ 10歳 呼び方は・・・マリアでいい」

と私達今第14遊撃小隊のメンバーはお互いに自己紹介しあった

明日香「眠いので雑談はありません」

明日香「感想やレビューをお待ちしております」

初陣（前書き）

どうも明日香です

また分けますがご容赦ください

初陣

私達 第14遊撃小隊はハンソン村の近くまできていた

「これより 第14遊撃小隊はハンソン村に駐留する帝国軍を全滅する」

「……………了解!!!」

「ジェイク小尉 たしか貴方がこの部隊の前の隊長ですね 貴方が隊長だったころのフォーメーションを教えてください」

「了解さかました 前衛が俺とハボックそれとリチャードで後衛がホオボスとエリーでした」

なるほど……それなら……

「ならそのフォーメーションのまま私が前衛にリカ小尉が後衛に入る」

「……………了解」

「それじゃ作戦を説明する全員集まってくれ」

私の周りに全員が集まった

「ガーデンたのむ」

私は自分の相棒のガーデンに作戦情報を空中に投影してもらった

<ふうやつと私の出番ですか>

などと言いながら作戦エリアのハンソン村が映し出された

「情報によると私達 第14遊撃小隊の敵は帝国軍2個小隊 敵は村の中心にある教会を根城にしているらしい そこで私達 第14遊撃小隊はその教会に奇襲を仕掛けて敵の中枢を叩く」

私は作戦を全員に伝えた

「よーしヤロウドモ!いくぞ!!!」

おお小尉 気合いが入ってるな・・・

「よし 第14遊撃小隊出撃!!!」

「「「「「応!!!!」「」「」「」

私達は ハyson村に向かって移動した

ハyson村・・・

「敵を発見した これより戦闘に入る」

私はメシアとシンクーを起動させてるそして・・・

バーン バーン

撃った

放たれた弾はおそらく村を周回警備をしていたと思われる帝国兵の頭を撃ち抜いた

「すげ……」

エリー伍長が驚いているが私はそれを無視して言った

「このまま一気にいくぞ！遅れるな！」

私は飛ぶスピードを上げて突撃した

村にサイレンが鳴り響くが……

「遅い！」

私はメシアとシンクーを構えて放った

さあ私にとっては10年ぶりの戦場だ……いくぞ……!

私はメシアとシンクーのトリガーを引いた

初陣2につづきます

初陣（後書き）

明日香「どうも明日香です今はマリアちゃんは戦場なので私一人です」

明日香「さてではまずは・・・」

明日香「ビーティ様感想ありがとうございますこれからがんばるので応援よろしくお願いします」

明日香「次は・・・感想などを募集していますどうかよろしく願いします」

明日香「ではまた・・・」

初陣2(前書き)

ついでに

初陣 2

ジエイク視点

俺はマリア隊長の後ろを飛んでいる

もうすぐ作戦エリアにつくな・・・

この作戦はマリア隊長とリカ小尉の初陣だ・・・

俺の初陣はたしか・・・17のところだったな・・・確か初めて敵を撃ったときはやばかったな・・・

俺の初陣は簡単な偵察任務だったが運悪く帝国兵と出会いとつさに俺は帝国兵を撃った 撃たれた帝国兵は簡単に死んだ 仲間からはよくやったと言われたが俺はその場で八いた 撃つのは簡単だった だけど精神的にはかなりやばかった

あれを・・・彼女達は耐えられるのか・・・

あの頃の俺はそれなりに覚悟はしていたがそれでも八いた・・・彼女達はまだ10歳だ 覚悟をしても最悪・・・

などと考えているとマリア隊長が・・・

「敵を発見した これより戦闘に入る」

お・・・敵か・・・確かにいるな・・・だけどこの距離じゃ俺の魔法は届かないな・・・長距離魔法が得意なエリーでもきついかな・・・

バーン バーン

なっ！・・・マリア隊長！

マリア隊長の撃った弾は帝国兵の頭を撃ち抜いた

「すげ・・・」

エリーがそうつぶやいた

確かにすごいな・・・しかも顔色一つ変えないなんて・・・

「このまま一気にいくぞ！遅れるな！」

と言い残しマリア隊長はスピードを上げて突撃した

「は、はやい！」

くそ・・・なんなんだ彼女は本当に10歳かよ！

俺はマリア隊長に追いつくためにスピードを上げた

「2時方向から敵！ 数5」

ハボツクの声が響く

な！こんな時に！しかたない！

「いくぞヤロウども こいつらをとっとかたずけて隊長のもとに

むかつぞ！」

「「「「応!!!!!!!!!!」」」」

「リカ小尉は後方支援を頼みます！」

「わ、わかりました」

よし・・・

「いくぞー！！！！」

俺達は戦闘を開始した

マリア視点

私は教会の前に到着した

敵は・・・外に4人 教会の中に3人が・・・

私は気配を読み敵の位置を確認した

どうやら敵が私にきずいて空に上がってくる

武器はランス型のデバイスが2つとロッド型のデバイスが2つ・・・
なら敵のフォーメーションは前衛が2 後衛2か・・・なら！

私はメシアをランス型のデバイスを持つ2人にむけてフルオートで
撃つ

ババババババババババババ

ランス型デバイスを持つ2人はそれを簡単にかわす

「へっそんな弾に当たるかよ」

ランス型のデバイスをもつ片方の方がなんか言っているが・・・

初陣 2 (後書き)

初陣 3 に つづきます

明日香「マリアのチートなみの戦闘力がでます」

初陣3(前書き)

どうも明日香です

続きです

初陣 3

「いや・・・予想どうりだ」

ランス型のデバイスをもつ2人に向かって撃つたのはあえて避けれる弾だった 実際2人はよみどりに避けてくれたそして・・・後ろにいて魔法を詠唱していたロッド型のデバイス使いの片方がスキだらけになった

私はシンクローを構えてスキだらけになったロッド型のデバイスを使う帝国兵を撃つ

バーン

放たれた弾はロッド型のデバイスを使う帝国兵の頭を正確に撃ち抜いた

撃たれた帝国兵は落ちていく

「ジエイツティー」

落ちた帝国兵の名前だろうか？ランス型のデバイスを持つ帝国兵の片方が叫ぶ

「戦いの中でよそみか・・・」

私はメシアを待機状態に戻してガーデンをモード2を展開して叫んだ帝国兵に突撃する

「なあ！ くそー！ー！」

ランス型のデバイスを使う帝国兵は構えるか私はランス型のデバイスごと帝国兵を両断する

切り裂かれた帝国兵は落ちていく・・・ん？ 魔力弾か・・・

おそらくロッド型のデバイスを持つ帝国兵のもう片方が放った弾だろう・・・

私はシンクローをフルオートで撃って魔力弾を撃ち落とす。

「ばかな・・・」

魔力弾を撃ったロッド型のデバイスを持つ帝国兵は私が魔力弾を撃ち落とすのを驚いている

「スキだらけだ」

私はシンクローでロッド型のデバイスを持つ帝国兵の頭を撃ち抜く

あと一人・・・か

「うおおおおお！！！」

最後の1人のランス型のデバイスを持つ帝国兵は私の後ろから攻撃してくる

私は魔力で身体能力を強化して回し蹴りを食らわせる

帝国兵は吹き飛ばされて地面に叩きつけられた

「まだ生きてるか・・・」

どうやら叩きつけられ帝国兵はまだ生きていた

私は帝国兵にとどめをさすために地上におりた

「はぁ・・・はぁ・・・」

地上では叩き落とされた帝国兵が必死に逃げようとしていた。どうやら叩きつけられときに両足が骨折したらしい。足がめちゃくちゃな方向に曲がっている。

「・・・」

私は無言で帝国兵にシンクーを向けた・・・

「ヒイヒイヒイ た、助けて」 バーン

私は帝国兵の言葉が終わらないうちに帝国兵の頭を撃ち抜いた

私は教会を見上げてた

あとはこの中にいるやつだけか・・・

私はガーデンを待機状態に戻しメシアを展開しシンクーのマガジンを取り替えた

「さて・・・いくか・・・」

私は教会に入った
続きます

初陣3（後書き）

明日香「どうも明日香ですまずはじめに・・・」

明日香「この作品はリリカルなのはAnother Fuckin
g Great!」とは関係はありませんもし勘違いした人達はす
みません」

マリア「まあこの作品は作者がリリカルなのはAnother F
ucking Great!」を見て頭につかんだのを文にしてい
る作者だからな・・・」

明日香「そうなんですよ・・・どうしても序盤が書けなくてネット
サーフィンしてたらリリカルなのはAnother Fuckin
g Great!」にであって少しネタをもらいました」

マリア「でもそれは普通パクリじゃ・・・」

明日香「大丈夫この先はほとんどオリジナルだから」

明日香「てなわけで勘違いされた皆様申し訳ありませんでした」

明日香「こんごともこの作品をよろしくお願いいたします」

初陣 4 (前書き)

深夜投稿

初陣 4

教会に入った私を迎えのは魔力弾だった

「ちっ」

私はメシアとシンクーをフルオートで魔力弾を打ち落とす

ババババババババババ

シギアス視点

俺はシギアス・レナード 神聖帝国軍第32小隊隊長だ 俺たちに
あたえられた任務は後方攪乱 任務を第42小隊と合同で当たると
ゆうものだった我々は王国にある村を制圧した。そして村を爆発し
帝国に戻る予定だったが先ほどここにきた王国の部隊にほとんど制
圧されてしまった第42小隊は敵を迎撃に向かったが先ほど連絡が
途切れたしかも外に配置したやつらも一人にやられたしかもそれが
少女だとゆうことだそしてその少女は教会に入ってきた

俺は教会に配置していた部活と共に魔力弾を打ち込んだ・・・

もうかなり打ち込んだ

周りから煙が上がり少女がどうなったか分からない

「あれだけ撃つたんだやれないわけがない」

パーン

部活の人が倒れる

「カルロス！ くそ！」

もう人が魔力弾をつくりだすが・・・

「遅い・・・」

「ぐへ！」

少女の手に持つナイフで部下が喉を切り裂かれ絶命する

「あとはお前だけ・・・」

少女は返り血で濡れている

「くそおおお！」

俺は最後のあがきで少女に突撃した

マリア視点

「くそおおお！」

帝国軍のおそらくこの部隊の隊長だろうか？ 彼は私に突撃してきた

私は先ほど展開したガーデンのモード1を構えて・・・敵隊長の首を切り裂いた

「ばけ・・・もの・・・」

敵隊長の首からでた血で私の顔が汚れるが特に気にしない

敵は・・・もういないみたいだな

私はジェイク少尉たちと合流するため教会をでた

初陣4（後書き）

明日香「戦闘シーン終了このあとは事後処理」

明日香「ちなみにつぎはシリアス半分ほのぼの半分です」

明日香「あと感想をお待ちしています」

ハイソン村戦闘報告書（前書き）

ハイソン村戦闘報告書です

短いです

ハイソン村戦闘報告書

ジェイク視点

俺はこの前おきたハイソン村における帝国軍との戦闘の報告書を作成している

ん？・・・なぜ俺が作成してるかって？

それは本来作成するはずのマリア隊長がある事件ですねて部屋らでなくなってしまうため俺が作成することになった

さて書くか・・・

ハイソン村における帝国軍との戦闘報告書

記入者 ジェイク・アバロック

我々 第14遊撃小隊は 月 日にハイソン村にて帝国軍と戦闘になりこれを排除する

帝国軍は全滅

第14小隊は戦死者無し

戦闘にをける撃破記録は

マリア・テルミドル中尉・・・9人

ジエイク・アバロツク小尉・・・2人

リカ・マクスエル小尉・・・1人

ハボツク・フラガン軍曹・・・2人となる

今回の戦闘においてはマリア・テルミドル中尉の戦闘力が高いことを証明した

以上がハイソン村にて帝国軍との戦闘の報告書である

ふう・・・こんなのでいいか・・・

余談だからリカ少尉はやっぱり敵を落とすとき八いたししかしマリア隊長は八くどころか返り血で顔が汚れても無表情だった

・ 彼女は一体なんなのか俺はとて10歳の少女には見えなかった・・・

ハイソン村戦闘報告書（後書き）

連続投稿です

もし誤字があったら教えてください

ある日の第14遊撃隊（前書き）

連続投稿

ある日の第14遊撃隊

ハポック視点

ジェイクが報告書を作成している時第14遊撃小隊寄宿舎

マリア・テルミドール中尉の部屋の前でエリーが叫んでいた

「隊長！開けてください！隊長！」

そしてマリア隊長は・・・部屋に引きこもっていた

どうしてこうなった・・・

話は数日前までさかのぼる

ハイソン村の作戦が終わってマリア隊長は基地指令や各部所に挨拶回りをし終わったころ・・・

俺はジェイクとエリーそれとホオボスと寄宿舎の食堂で飯を食っていたらマリア隊長がやってきた

ちなみにリチャードはいま出張中なのでいない

「お・・・マリア隊長こっちに来て一緒に食べませんか？」

とジェイクがマリア隊長をさそった

マリア隊長はこっちに来て俺の前に座る

隊長の食事は・・・C定食か味噌汁に白いご飯 それとサラダといった内容の定食だ

ちなみに俺はラーメンとチャーハン

ジェイクはC定食

エリーはうどん

ホオボスはカレーだ

ん？・・・よく見ると隊長のトレイには見慣れない箱が置いてあった

「隊長それはなんですかい？」

俺はきになって箱を指差して言った

「ああこれは角砂糖だ」

「」「角砂糖？」「」

コーヒーがあるなら角砂糖があるのには納得できるだが隊長のトレイにはコーヒーはない

何につかうんだ？

そんな疑問を隊長は解決してくれた・・・

「」「！」「」

隊長はお茶に角砂糖を4つ放り込んだ

ま、まじかよ・・・

しかし隊長の珍行動は止まらない

味噌汁に角砂糖を5つ放り込みご飯のにも角砂糖を2つおいて砕いてかきまぜたサラダにはそのまま角砂糖が4つプラスされた

「いただきます」

ん！？今あの無表情な隊長が少し笑っただと！

隊長は美味しそうに食べている

あ、ありえね・・・

俺達は食事をつづけた　かなり食欲が無くなったが・・・

15分後・・・

隊長は食べ終わると用事があると言って食堂をでていった

俺達は特にやる事がなかったためそのまま食堂で雑談をしていると・・・

「あれは・・・リカ少尉だな・・・リカ少尉ここで今っしょに食べませんか？」

リカ少尉はこっちにきて席に座った

リカ少尉は・・・C定食か・・・よかった普通に食べている

続きます

ある日の第14遊撃隊（後書き）

ある日の第14遊撃隊2に続きます

ある日の第14遊撃隊2（前書き）

続きです

ある日の第14遊撃隊2

「そうゆえばリカ少尉とマリア隊長は幼なじみでしたよね」

「ええそうですよ」

「ならマリア隊長のあの食事のことは知ってる？」

おおナイスだエリー幼なじみなら知ってるだろう

俺もすごく気になってたからな・・・ぜひ聞きたい

「あああれですか・・・マリアちゃん甘い物が大好きでいつの間にか食事まで甘い物になっちゃったんです」

「そうなんだ・・・」

エリー顔が引きつってるぞ

しかしいくら甘い物好きだからって限度があるだろ・・・

リカ少尉は食事が終わるとマリア隊長を追いかけてくると言っ
て食堂をでた

そして俺達は雑談をしているとエリーが・・・

「なあ・・・マリア隊長が甘い物好きなら一回寄宿舍にある甘い物を全部かくしたらどんな反応をするんだろう・・・」

「」「」「！」「」「」

この一言により俺達は寄宿舍の甘い物を隠す作戦をたてた
今ならわかるこれはやってはいけないことだったと・・・

数日後・・・

俺達は隊長の部屋から角砂糖と甘いお菓子を合計5kgぐらい回収
そして寄宿舍の甘い物をすべて回収した

そして・・・

マリア視点

ふう・・・今日も疲れたな私は自室にもどりくつろいでた

ああ・・・報告書を書かないとな・・・そのまえに甘い物でも食べ
よ

私は角砂糖が入った箱を開けたが・・・

「あれ・・・ない？」

切らしていたかな？

まあいつか予備を開けよ・・・

しかし角砂糖の予備もなくなっていた

あれ・・・？

おかしい・・・よく見るとお菓子もなくなっている

冷静に考えたらわかることだかこの時の私は甘い物がないとゆうことによるシヨックでまともに頭が回らなかった

「そつだ・・・食堂なら甘い物が・・・」

私は食堂に移動した

ある日の第14遊撃隊3に続きます

ある日の第14遊撃隊2（後書き）

一言

明日香「次回マリア暴走！」

ある日の第14遊撃隊3（前書き）

連続投稿

ある日の第14遊撃隊3

ハボツク視点

俺達は今食堂で雑談をしていた 一緒にいるのは隊長から甘い物を奪ったメンバー

「さて・・・マリア隊長どんな反応するだろう」

ジェイク 顔があくどいぞ・・・

「隊長なら冷静に行動するだろう」

ホオボス 俺もそれは同感だ

「案外泣き喚くんじゃね」

エリー それはない 隊長が泣き喚くなら俺は逆立ちしてうどんを鼻から食べてもいいぞ

などと話していると食堂に隊長が現れた

フラフラとゆっくり歩いていつもよりもかなり感情のない目で「甘いもの・・・甘いもの・・・」とつぶやいてる

あれ・・・なんかかなりヤバくないか・・・

全員がそう思ったらしいが時はすでにおそし隊長は食堂にある食券売り場を見て固まっていた

食券売り場では見事に甘い物に売り切れの文字・・・

ちなみに食堂の人達にも協力してもらった

新隊長の歓迎のデモンストレーションと言ったら協力してくれたぜ

「甘い物が・・・甘いものが・・・あまい・・・ヒック・・・」

マリア隊長は動かなくなりそして・・・

「うえーん 甘い物がなくなつたよー！」

泣きはじめた

ちよーまじかよ

「甘い物ー！ 甘い物がないよー！」

いつもの無表情を崩して泣き喚く隊長

「エリーはダッシュで隠した甘い物をとってこい ホオボスはエリーのカバー 俺とハボックは隊長を押さえるぞ」

ジエイクは的確に指示をだす さすが元隊長だ！

「いくぞ！」

「「「応！！！」」」

俺とジェイクは泣き喚く隊長のもとに向かった

「マリア隊長 大丈夫です今ホオボスとエリーが甘い物を取りに行きましたから」

「ヒック・・・ほんと?・・・」

隊長は涙目+上目遣いでこっちをみる

うおお!これは・・・破壊力が高いぞ!

ジェイクなんてなぜか鼻を押さえてる

ジェイクまさかお前・・・

とその時・・・

「またせたな!」

「持ってきたぜ!」

ホオボスとエリーが甘い物を持ってきた

エリーが隊長に角砂糖の入った箱を渡すと隊長は角砂糖の箱を開けて角砂糖を一つ口に入れた

モグモグ・・・にぱっ

隊長が今までにない笑みで笑う・・・

ふう・・・一件落着か・・・

隊長は角砂糖をもう一つ口に入れて聞いてきた

「そうゆえばなんで貴方達が私の角砂糖を持つてるの？」

ある日の第14遊撃隊4に続きます

ある日の第14遊撃隊3（後書き）

一言

明日香「ジェイクのロリ」
「」

ある日の第14遊撃小隊4（前書き）

連続投稿ラスト

短いがご容赦ください

ある日の第14遊撃小队4

「「「「そ、それは……」「」「」

俺達は隊長にこれまでのことを全て話した

「そうなんだ……」

隊長はいつもの無表情に戻っていた

「許してくれませんか？」

とジエイクが聞く

「え？ゆるすもなにもないよ」

ん？怒ってないのか？

「それじゃ a」だって皆ここで死んじゃうんだから「……へ？」

マリア隊長からすごい量の魔力が溢れてくる

「ガーデンセットアップ」

了解

隊長は形状は変わってないがデバイスを起動させたみたいだなにか
いやな予感がする……

「凍てつく氷帝の力をここに……」

主！その呪文はk「やれ」……了解

そして次の瞬間……

俺達はこうらされた……

そして翌日

「隊長ー！開けて下さい 昨日はすみませんでした」

俺達はあのとリカ少尉に助けてもらいなんとか生き延びた

しかし隊長は昨日から部屋にこもってしまい出てこなくなった

ちなみにジェイクは報告書を変わりに書いている

そしてエリーとホオボスと俺は隊長の部屋の前で戦闘？中だ

こうして最初につながる

このあと俺達は一つのルールを作った

隊長から甘い物を奪ってはならない

こうして甘い物事件は幕をとじた

余談だが隊長のご機嫌を直すため俺達は角砂糖を合計3kgを買ったことになった

ある日の第14遊撃小隊4（後書き）

明日香「さて・・・今回はマリアが泣き喚いたな・・・」

マリア「それはおいといて・・・今日はゲストを呼んだぞ」

明日香「だれを呼んだの？」

ハボック「どうもハボックだ・・・で隊長 自分はなぜここに？」

マリア「それは・・・」

明日香「それは？」

マリア「ハボックが逆立ちしてうどんを鼻で食べるって言ったから
ならここでやってもらおうと思ってよんだ」

ハボック「ちょ隊長！あれは冗談で・・・」

マリア「やれ」

明日香「向こうはなんだかカオスですのでこっちですすめます」

明日香「まず誤字があったら教えてください」

明日香「あと感想もお待ちしています」

明日香「ではまた次回にお会いしましょう」

突然ですが

明日香「キャラクターを募集します」

マリア「なんでまたいきなり？」

明日香「いやなんとなく・・・」

マリア「じっさいそれって有名になってからやるもんじゃね？」

明日香「べつにいいじゃん」

マリア「身の程しらずが・・・」

明日香「などでキャラクターを募集します」

明日香「敵・見方どちらでも構いません」

明日香「性格や性別 設定あと戦闘キャラならデバイスの設定もよろしくです」

明日香「採用者には・・・マリアを自由にする権利をプレゼント」

マリア「なに！・・・まあ問題ないか・・・こんな作品を見てるやつなんていないから・・・」

明日香「ひどい(T・T)」

明日香「一応締め切りは平成23年の9月30日までです」

明日香「よろしくお願いたします」
m
—
(
m

護衛任務

ある日私は基地指令のハーリー・バステス中佐に呼び出され私は指令の部屋の前まで来ていた

「マリア・テルミドール中尉です」

「入りたまえ」

「失礼します」

私は部屋にはいる

「よく来てくれ中尉」

部屋にはバステス中佐ともう一人そこにいた

「紹介しよう中尉 彼はガリアン・マザリアスだ」

ガリアン・マザリアス 彼の名前を知らない者はいないとゆえるほどの有名人 マザリアスカンパニーの社長だ マザリアスカンパニー 魔法兵器から建築業 食品業とエトセトラ・・・ とにかくすごい会社の社長さんだ

「初めましてMr・マザリアス マリア・テルミドール中尉です」

「先ほど紹介されたガリアン・マザリアスです よろしくテルミドール中尉」

私はガリアンと握手をする

「さて中尉 君を呼んだのは新たな任務についてだ」

任務か・・・実は第14遊撃小隊は正式な任務があたえられるのは初めましてだ 帝国軍の迎撃などはよくあるがこのような形は初めましてだ

「任務の内容はMr・マザリアスの一人娘のミア・マザリアスの護衛をしてもらいたい期間はMr・マザリアスが帝国領に行つたい間となる」

「質問してよろしいですか？」

「許可する」

「なぜこのような任務を？」

私は疑問だった ガリアンが帝国に行っている間彼の娘をなぜ護衛するのか？

「それは私が話そう」

ガリアンは説明を始めた

本社は王国マザリアスカンパニーだか開戦前には帝国にも支社があったが開戦と同時に全て引き払つたらしい それにより一部の帝国市民の怒りがかつたらしくその報復にできる可能性があるらしい そしてガリアンが王国を離れている間に娘を拉致するとゆう情報をつかんだらしい

「なるほど 了解しました 第14遊撃小隊はミリア・マザリアスの護衛任務を受理しました」

「うむくれぐれもたのむぞ」

「娘をよろしく頼むよ」

「了解しました」

こうしてミリア・マザリアス護衛作戦が開始された

護衛任務（後書き）

連続投稿

護衛任務2

さて・・・どうするか・・・

私は指令の部屋をでて第14遊撃小隊の寄宿舍にむかいながら渡された資料を見ていた

ミリア・マザリアス

年齢12歳

国立第三小学校6年2組に所属

魔法適切B

家族関係

父親一人

母親は死亡

周辺情報

使用人嫌いで使用人の数は最低限

学校では交友関係は広い

性格 好奇心旺盛

はあ・・・

実はこの任務には一つ条件がある護衛対象に私達の存在を知られてはならないとゆう条件だまったくガリアンもよけいな条件をつけや

がって・・・

とにかく配置を考えるか周辺警護はハボック軍曹達にまかせて・・・
リカとジェイク少尉を屋敷に使用人として潜りこせて・・・私は・・・

なんとか配置を考え終わると私は寄宿舎にたどり着いた私は寄宿舎に入ると廊下を歩いていたらジェイク少尉に話し掛けた

「ジェイク少尉」

「あ・・・マリア隊長お疲れ様です どうしましたか？」

「次の任務が決まった 1時間後にブリーフィングルームでブリーフィングをやるから全員に言っておいてくれ」

「了解しました」

私はジェイク少尉と別れて自室に向かった

さてブリーフィングまで1時間・・・

すこし寝るか・・・

最近 夜にあまり寝てなかったためかなり眠かったりする自室に戻った私はベットに入って目を閉じた

1時間後・・・ブリーフィングルーム

「さて・・・全員いるな」

私は全員そろっていること確認する

「ではこれよりブリーフィングを始める」

「まずはこれを見てくれ」

私はブリーフィングルームにある大型ウィンドウにミリア・マザリアスのデータを表示する

「今回の任務は護衛任務で護衛対象はこのミリア・マザリアスになる」

私は全員にデータを送る

「詳しい内容はそこに書いてあるか確認してくれ」

ちなみにデータの作成は全部ガーデンが私が寝る間にやってくれました

「なおこの任務は護衛対象に私達の存在を知られてはならないことが前提となる」

「ここまでで何か質問はあるか？」

ホオボス軍曹が手を上げる

「ホオボス軍曹」

「この任務でもし我々の存在を隠し切れない場合はどうするんです

か？」

「隠し切ることが前提だが・・・もしそうなった場合は私達の存在を理解してもらおうしかない」

「了解」

「他にはないか？」

誰もいないか・・・

続きます

護衛任務2（後書き）

連続投稿

護衛任務3

「では次は配置だか・・・まずリカ少尉とジエイク少尉は護衛対象の屋敷に潜入してもらう」

「へ？」

ジエイク少尉とリカからおかしな返事が帰ってくる

「ま、マリアちゃん私にそんなとこできないよ」

「自分も潜入はちよつと・・・」

「やれ」

「はい・・・」

二人はおとなしくなった・・・

「あとは私を除くメンバーは護衛対象の周辺警護を担当 リーダーはハボック」

「了解」

「なお今回の任務は私達の念話の盗聴を防ぐため私が作った通信用デバイスを使用する 詳しいデータは先ほど転送したデータに入れているから必ず読むように」

私が徹夜を続けて作った3つのデバイスの中の一つそれがこの通信

用デバイス

簡単に説明すると盗聴不可能な無線機である

「続いてコールサインだがこれもデータに入っているから必ず読むように」

「では何か質問はないか？」

ジェイク少尉が手を上げる

「失礼ですが MARIA 隊長はどこに配置になるのですか？」

「私はリカ少尉やジェイク少尉とは別口で潜入する」

「了解しました」

「他に質問はあるか？」

ないようだ

「では各自 行動に入ってくれ」

「『『『『『了解！！』』』』』」

こうしてブリーフィングは終わった

さて・・・私も準備するか・・・

そして・・・

数日後・・・

首都レベユ

国立第三小学校三人称視点・・・

《こちらシールド1配置完了》

《シールド2配置完了》

《こちらシールド3配置についたぜ》

《こちらシールド4配置完了した》

第14遊撃小隊は今日から護衛任務を開始した

ハボツク率いるシールド分隊は国立第三小学校の回りに一般人として潜りこんでいる

ちなみに・・・

シールド1はハボツク

シールド2はホオボス

シールド3はエリー

シールド4はリチャード

である

続きます

護衛任務3 (後書き)

連続投稿

護衛任務4

《こちらアイギス1 シールド分隊聞こえるか》

《こちらシールド1だどうした?》

《もうすぐジュリエットが学校に到着する警戒してくれ》

《了解 シールド分隊へ お姫様の到着だ周辺を警戒しろ》

《《シールド2(3)(4) 了解》》

ちなみに・・・

アイギス1はジェイク

アイギス2はリカ

ジュリエットは護衛対象のミリア

である

ちなみにジェイクは運転手 リカはメイド見習いとして潜入している

《こちらアイギス1 ジュリエットの登校を確認した》

《シールド1了解 シールド分隊は学校の周辺警護につつまる》

《了解 エイジス1は引き続きジュリエットを護衛する》

おわかりだろうがエイジス1はマリアである

ハボック視点

俺達シールド分隊はお姫様が登校を確認して学校の回りにサーチャーを仕掛けてシールド分隊の拠点に戻った

ちなみにシールド分隊の拠点は学校の近くのマンションとお姫様の家の近くのマンションの2つある

「おおハボック 戻ったか」

拠点に帰るとエリーは酒を飲んでいた

「お帰りハボック」

トリチャードが話し掛けてくるが・・・

「ホオボスはまだか・・・エリー任務中に酒は感心できないぞ
ま た隊長にこおらされるぞ」

エリーはこの前の一件からよく隊長にこおらされている 理由は色々あるが今回みたいに任務中に酒を飲んでいるのがばれたら間違いなくこおらされるだろう・・・

「大丈夫 大丈夫ノールコールだから」

大丈夫なのか？

「戻ったぞ」

とホオボスが戻ってくるそしてエリーが酒を飲んでいるのを見て何か言っていたそうにするが有りらめたみたいだ

「そうゆえばマリア隊長ってどうやって潜入してるのかな？」

トリチャードが思いついたように言った

「たしかにきになるな・・・」

マリア隊長の担当は学校で夜は俺達に合流することになっている

「潜入してるらしいがいつたい・・・」

そのときエリーが・・・

「おい皆！ これを見てみるよ！」

エリーが見ていたのはお姫様のクラスに設定したマリアちゃん特製監視カメラ（リカ少尉命名）には隊長がうつっていたそして・・・

「今日からこの学校に転校することになったミカ・ジーナスです
ミカって読んでくださいいね」

続きます

護衛任務4（後書き）

連続投稿

護衛任務 5

マリア視点

時間は少し戻る

私はジュリエットが登校して教室に入るのを確認して職員室に向かった

私は今日からこの学校に転校してきたミカ・ジーナスとして通うことになるちなみに父と母が戦死したため叔父に引き取られこの学校にきたことになっている　ちなみに過去の経歴や戸籍も完璧に偽造した　ちなみに個人でやったため少し時間がかかった　一応病弱設定を入れてある

もちろん私のクラスはジュリエットと一緒にするように細工した

私の偽りの経歴を見たのか担任の先生はかなり私のことを心配してきたが全て適当に流した

ちなみに私はいつもの無表情ではなくかなりの猫をかぶりすでに別人になりきっていたちなみに腰まで伸びた髪をまとめてポニーテールにしてそして伊達メガネで変装しているそして今私はクラスの前までできていた・・・

「それじゃあここで待ってね呼んだら入ってきてね」

と担任の女教師が教室に入っっていったい

私はデバイスの状態を確認する通信用デバイスはポケット メシアとシンカーはスカートの中に隠した ガーデンは首にかけて服の中に隠した そして新しく作った2つのデバイスは両手首につけたりソックスは服の袖の中に隠した

ちなみにこの学校の制服は白のロングスカートに白いセーラー服である

ちなみに私は転生して初めてのスカートにかなり混乱したスカートってかなりスースーするんだよね・・・

「ミカさん入ってきてね」

お・・・呼ばれたな・・・さて行くか 私は教室に入って自己紹介をした

「今日からこの学校に転校することになったミカ・ジーナスです
ミカって読んでくださいね」

どうだ！ 俺の営業スマイル！

クラスはなぜかお通夜状態になった

あ、あれ？

しかし次の瞬間

回りからかなりうるさい声が上がった

主に男子から一部女子からも声が上がった

「あらあら仕方ないですね一時間目はミカさんへの質問タイムにしましょ」

な！・・・担任がそれでいいのか！

担任の一言で私にたいしての質問地獄がはじまった

護衛任務5（後書き）

連続投稿

質問タイム！（前書き）

ネタです

質問タイム！

「急な転校だったけどどうして？」（女生徒A）

「家の都合です」（マリア）

「前はどこに住んでいたの？」（男子生徒A）

「リマイアスです」（マリア）

「スリーサイズは？」（男子生徒B）

「禁則事項」（マリア）

「彼はいるの？」（男子生徒C）

「いませんよ」（マリア）

「私をお姉様とよんでみない？」（女生徒B）

「遠慮します」（マリア）

「付き合ってください！」（男子生徒D）

「ごめんなさい」（マリア）

「それじゃあ罵ってください！」（男子生徒D）

「このブタ野郎！」（マリア）

ちよつとまで最後の当たりかなりおかしいだろ

《隊長なにしてるんですか》 (エリー)

《なんでお前まで質問してるんだエリー伍長!》 (マリア)

《いやなぜかやらないといけない気がさて・・・》 (エリー)

《後でこつらす!》 (マリア)

《そんな〜》 (エリー)

「魔法はつかえる?」 (女生徒C)

「あるていどなら」 (マリア)

「部下はどうするの?」 (女生徒D)

「私体が弱いから・・・」 (マリア)

「問おう貴女が私のマスターか」 (?)

「違います」 (マリア)

「ハア・・・ハア・・・」 「暴走した男子生徒D」

「ちかずくなキモイ」 (マリア)

「顔が濡れて力が出ない」 (アンパンでできた人?)

「しらん」(マリア)

「どこに住んでるの？」(男子生徒D)

「なぜかお前には教えたくない」(マリア)

「初号機に乗れ」(某組織の指令)

「イ・ヤ・ダ」(マリア)

と・・・エトセトラ・・・

こんな感じで一時間目は過ぎていった

質問タイム！（後書き）

明日香「ネタに走りました」

あとタイトルを変えました

護衛任務 6

私にたいしての質問が終わり今は休み時間・・・

《こちらエイジス1 各分隊の状況を報告せよ》

《こちらシールド分隊以上は無し》

《アイギス分隊も異常はありません》

《了解 各自警戒をおこたるな》

《《了解！》》

ここからは日記みたいに書きます

ジュリエット＝ミリアですby

作者護衛任務1日目 マリア視点今日は特に異常もなかったジュリエットとは席が近くなり簡単な会話をした 彼女を護衛するならある程度の交友関係を築いたほうがいい護衛期間は残り2週間・・・何事も無ければいいが・・・

ミリア視点

今日 私のクラスに転校生がきました 名前はミカ・ジーナス 第一印象はまるでお人形のように可愛くて何か守ってあげたくなる才一ラを放っている女の子でした 席は私の横になり何度かお話して決心しました絶対に彼女とはお友達になってみせます

護衛任務2日目

マリア視点

今日も特に異常はなかったジュリエットは今日と一緒にお昼を食べた。私がパンを食べているとジュリエットが「そんなもの食ばかり食べていると健康に悪いわよ」とのこと。ジュリエットが明日からお弁当を作ってくれることになった。最初は断ったが決心は固いよ。うだ・・・

ミリア視点

今日はミカさんと一緒にお弁当を食べました。ミカさんのお弁当はパン一つだけ・・・私はいつもパンだけなのか聞いてみたら「そうだよ」ありませんパンだけなんてありませんなので私がお弁当を作ってきてあげることになりました。フッフッフこのまま交友関係を築いたミカさんをゲットしますよ。

護衛任務3日目

マリア視点

今日も異常はありませんでした。そしてお昼にジュリエットからお弁当をもらった。ジュリエットによると・・・「家にきた新しいメイドがとても料理がうまいのよ」「らしい試しに食べてみると・・・。リカの味だった。

ミリア視点

今日はミカさんにお弁当を作ってきました 最近家にきたメイドのリカさんに作ってもらいました ミカさんは美味しそうに食べてくれました

???視点

今回の俺達の任務はミア・マザリアスの拉致または殺害 手段は
とはない さて・・・行動開始だ・・・

護衛任務 6・5

護衛任務 4 日目

マリア視点

今日も異常はなかった 今日にはジュリエットの誘いで新しくできた喫茶店に行った 車で移動したのでジェイク少尉に会った ジェイク少尉は私とジュリエットが楽しそうに会話しているのを見て苦笑していた

ミリア視点

今日はミカさんと一緒に喫茶店にいきました

ミカさんは甘いもの好きらしくとても喜んでくれました

???視点

今日はターゲットが通っている学校の近くまで来たが学校の回りにはかなり高性能なサーチャーが仕掛けてあった もし俺達の中にトランプの専門家がいなかったら危なかっただろう おそらく誰かが学校の中にある何かを守っているのだろう しかし俺達にはやっぱり だ さて・・・どうするか
まあいざというときはアレがある・・・

護衛任務 6・5 (後書き)

あふれた・・・

護衛任務7

護衛任務5日目

マリア視点

今私はジュリエットと一緒に教室に向かっている

「そうゆえばミカさん」「なにミリアちゃん?」

「今日 私の家にきませんか?」

「いいんですか?」

「ええ」

「じゃあ行きますね」

まあいいか護衛しやすいし・・・

そのとき・・・

《シールド1より全員にサーチャーに反応あり場所は学校の中裏庭だ》

きたか!

《エイジス1より全シールド分隊へ私が確認に向かうジュリエットの周辺警護を頼む》

《こちらシールド1 了解しました》

「ごめんちょっとトイレに行くから先に行つてて」

「わかりました」

ジュリエットが教室に入るのを確認して私は裏庭に向かった

裏庭にたどり着いた私はそこにいた侵入者におどろいた

そこには大人ぐらいの大きさの機械人形がいた機械人形は右手をこちちに向かった上げるそして・・・

ダダダダ

手の甲にあった銃みたいなものので撃つてきた

くっ・・・

私は攻撃をかわすそしてメシアとシンクラーを起動させて構えて撃つた

バーンバーンバーン

頭右手両足に撃つが効果は薄いようだ

威力が低いのか・・・なら

私はシンクラーを待機状態に戻し左手首のデバイスを起動させるすると左手に盾があらわれる

機械人形は銃みたいなのを構えて撃つが私は盾でふせぐ機械人形からの攻撃が終わったのを確認して一気に距離をつめるそして盾の先端を機械人形に押し付ける

そして・・・

バゴーン

盾に仕込まれたパイルバンカーから放たれた弾は機械人形をバラバラにして吹き飛ばした機械人形は完全に破壊され動かなくなる他にはいないな・・・

私はデバイスを待機状態に戻した

《こちらエイジス1 侵入者を排除した 回収してほしい》

《こちらシールド1 回収ですか？ 処分じゃなくて》

《そうだったのむ》

《了解》

さて・・・もどるか・・・

私は教室に戻った

護衛任務7（後書き）

デバイス

デバイス名 ボルゲイン

待機状態 左リング

起動状態 シールドパイルバンカー

盾にパイルバンカーが搭載されたデバイス 火力はかなり高いが弾の作成がかなり大変 盾は実弾 魔法 に対してはかなりの防御力をほこるかなりの重さがあるが魔力を使って消している

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0137x/>

魔法少女リリカルなのは ~ Walkuresegment ~

2011年10月8日22時48分発行